

不主動の起動者 — 『自然学』 第八巻を中心に —

上林 昌太郎

西歐十七世紀科学革命の成果が常識となった現代の我々には奇異に思われるが、アリストテレスは天体を、生成・消滅を免れた神的な実体とみなしていた⁽¹⁾。このことは、彼のコルプスの随所に見て取れる。これら、最も見易い神の実体たる天体の延長線上に、「不主動の起動者」としての彼の神がいる。

アリストテレスの神論と言えは我々は先ず『形而上学』Λ巻(Λ)を想起するが、Λは『自然学』最終第八巻(VIII)にある神の存在証明を前提に論を進めている。

VIIIの、従って、彼の神存在証明の中核の、最も簡潔な要約を試みよう。「①宇宙をも含めた我々の世界には、久遠の過去から久遠の未来に到るまで、変化が断えず有る。②変化しつつある変化者には変化を引き起こす起動者が必ず有るが、無限背進を免れるためには、我々は不主動の起動者を想定せねばならぬ。③有限大の事物は無限大の起動力を有し得ず、従って、無限時間に亘る永遠の変化の原因者たり得ない。④宇宙は有限大であるから、無限大の事物は宇宙中には、従って、端的に、存しない。⑤故に、永遠の変化を引き起こし、従って、無限大の起動力を有する、非物体的な起動者が無ければならない(これは神にほかならない)⁽²⁾、がそれである⁽³⁾。

— 『自然学』 VIII の首尾

以下、「『自然学講義』の」、「多くの美^{うるわ}しい考察 (*theôrêmata*) に満ちた」(*Simplicius*, 1117, 3-6) 最終第八巻に目を向け、収穫し得る果実を籠に入れながらその内容を語り直す。ただ

(1) 新たな天体の生成が確認されたのは、いまだ肉眼・裸眼に頼らざるを得なかった 1572 年、T.Braheが、新星がカシオペア座内に登場するのを観察した時である (cf. *Cosmology Before Newton* (The Open University, 1980))。 (ただしI. Newtonは、ブラーエのいわゆる新星とは、吸引した彗星を新たな滋養として元気を取り戻した旧星にほかならぬ、と説明している (*Newton*, 525-6).)

(2) VIIIに「神」の語は出ないが、「非物体的な起動者」は、その内実からして神以外ではない、と考えるのが自然である。

(3) おのずから『自然学』VIIIのレジメともなる*Simplicius*, 1117, 6-14の大要は、「本巻は、以下を行うことによって、自然諸原理の研究 (*pragmateia*) に最善の締めくくり (*telos*) をつける。(i) 自然の第一の変化は永遠である (*aidios*) ことを論証する。(ii) 永遠の変化を介して、万有 (*to pan*) の永遠性を明瞭に告知する。(iii) 全自然研究 (*theôria*) を第一哲学に結びつける。これが本巻最大の事蹟である。(iv) 全自然存在 (*hê phusikê huparxis*) が非常の (むしろ「自然を超える」?) (*hyperphusês*) 原因に引っ掛っている (*exêrtêmenê*) ことを論証する」、というものである。

し、詳細な検討は最初の三章にのみ施すこととし、第六章以下はごく簡略な内容紹介にとどめる。

(1) 第一章 変化恒常論【この世界には、変化が絶えず有る。】

開巻劈頭でアリストテレスが立てる問は、「①変化は、以前は無かったのに生成し、再び消滅し行き、変化者が全く無い状態に帰するのか。②それとも、変化は生成もせず、消滅し行くことも無く、常に (aei) 有ったし、常に有るであろうし、不死かつ不止 (apauston) なるものとして、存在者に所属するのか。全ての自然事物にとって、変化が生命 (zoē) であるかのように」、という問、即ち、①変化非恒常論と②変化恒常論のいずれを是とするべきか、との問であり、アリストテレスは、②を是とする。ちなみに、論者を表示してみる。

	①変化非恒常論者	②変化恒常論者
宇宙無限論者	無し	アナクシマンドロス、レウキッポス、デモクリトス (これらの特定は、 <i>Ross, ad 250b18-19</i> による)
宇宙単一論者	アナクサゴラス【無際限期間不変化後突如変化型】、エムペドクレス【変化期・不変化期交番型】	アリストテレス

考察は、変化の定義、「変化し得る事物の、変化し得る事物としての限りに於ける現実態」(cf. III1.201a10-11) をアリアドネの糸に、先ず (イ) 過去方向で、次に (ロ) 将来方向で、なされる。即ち、

(イ) 能動者の側であれ、受動者の側であれ、現実態即完成態たる変化 (燃やすこと、燃やされること) が出来^{しゅつたい}する以前に、可能態に於いてあるものD (燃やし得るもの、燃やされ得るもの) が無ければならない。すると、変化についてのみならずDについても、(i) Dは或る時に生成したか、それとも、(ii) Dは変化が存在しない時にもまた常に存在していたか、のいずれかであること、必然となる。(i) 前者の場合、同一論法の繰り返しにより、変化は常に存在してきた、という結論が導かれる。(Dが生成するためにはD⁻が生成せねばならず、D⁻が生成するためにはD⁻が生成せねばならぬ、といった具合に、変化の一つである生成が常に先在せねばならぬから。) (ii) 後者の場合、最初の能動者、受動者が不変化の状態に在り続けてきたことについては、不変化が変化の欠如である以上、変化を阻止する要因が想定されねばならないが、この阻止要因の作用も一種の変化と考えられる⁽⁴⁾。ならば、最初の変化以前に変化が存在した、という、理に背く結論が生じてしまう。

(ロ) 能動者、受動者の双方について変化の現実態と可能態の終結が同時でないことは、我々日常の見聞である。故に、最終の変化が有ったとして、これが終結しても、Dがなお残存する。すると、変化の全き消滅のためには、Dの消滅という変化が、また、Dを消滅させ得るD⁺がなければならず、同様に、D⁺の消滅という変化、およびD⁺を消滅させ得るD⁺⁺が

⁽⁴⁾ '(11)There must be some change to cancel the cause of M1 (=a first mover)'s being at rest.'という論証の鎖を挿入してアリストテレスの議論を明瞭にする *Graham, ad 251a17-28* の方向で理解する。

無ければならぬことになる。要するに、過去方向の場合と方向こそ違え同様の論法で、最終の変化の後にさらなる変化が有る、という、理に背く結論が生じてしまう。⁽⁵⁾

アリストテレスは以上を総括して、「変化は永遠的であり、その有無が時に応じることはない。変化が有る時と無い時が有る、との論は、拵え物 (*plasma*⁽⁶⁾) に見える」、と言う。

なお、二人の具体的な①論者を批判し、己が所論、変化永遠説を確認する際、重要な論点が語られる。即ち、(i) 或るとき理性が変化を作り込み、無限の期間、一緒くた（一即多）に (*homou*) 静止していた万物を分離した (*diakrinai*)、と言うアナクサゴラスは、理性がその時点で起動せざるを得なかった特段の事情を語ることがなく、従って、彼の宇宙には秩序が無い。しかしながら、自然によってあるものは一義的乃至単純であり (*haplôs ekhei to phusei*)、時に応じて変移する体のものではない。(ii) よし、単純でない場合であれ、自然の非単純性 (*to mê haploun*) には比即理^レが有る。故に、アナクサゴラスに比すれば、変化期・不変化期交番論のエムペドクレスにより理が有る。彼の論には、或る秩序が既に見て取れるから。⁽⁷⁾ しかしながら、論者たる者は、己が論を、帰納か論証によって説明せねばならぬ。この点、エムペドクレスもその責を果しておらず、彼の主張は成り立たない。

このようにアリストテレスは、自然の斉一性、単純性を先言措定とし⁽⁸⁾、以て他の批判に充てる。

(2) 第二章 反・変化恒常論とその論駁

⁽⁵⁾ なお、(イ) と (ロ) の間、251b10-28 に、もう一つの議論、(ロ) に対する付論 (cf. *pros de toutois* (251b10)) (ロ´) が介在する。「時間に於いて我々が捉え (*labein*) 得るのは、今のみである。今は将来の時間の始点 (*arkhê*) と過去の時間の終点 (*teleutê*) とを同時に有する中点 (*mesotês*) である。∴今の前後に、即ち、将来と過去の両方向に、時間が常に有る。∴時間の様態たる変化も常に有る」、という、言わば、パルメニデス・ゼノンがらみの論法である。(ロ´) の位置付けに関しては、‘This section interrupts the main argument of the chapter...b10-28 adds a more general argument in favour of the eternity of time.’ (Ross, ad 251b10-28) が妥当である。

⁽⁶⁾ グレアム訳は、*sheer fantasy* (cf. *Graham*, ad 252a5)。

⁽⁷⁾ ‘Empedocles at least treats the alternation of rest and motion as a law of the universe’ と Ross, ad 252a19-22 は註する。

⁽⁸⁾ 「自然により、自然に即してある事物 (*ta phusei kai kata phusin*) の如何なるものも無秩序で (*ataktion*) はない。自然は、万物にとって、秩序 (*taxis*) の原因であるから」 (252a11-12) (cf. 「全ての変化に於いて同様である (*homoiôs ekhein*) ことは自然にかなっている (*phusikon*)」 (7.261b25-26))。

なお、VIII 中に見出し得る、これに類したアリストテレスの先言措定には、6.259a10-12 (永遠の第一起動者の数が無限個ではなく有限個、さらには単一、との予想を述べて、「自然中には、有限なもの即より善きものがあるべきだ」、7.260b22-23 (断続的ではなく連続的な変化の存在を論証して、「可能である場合には、より善きものが常に自然中に所属する、と我々は考える」、261a8-9 (不滅の変化者 (=天体) が有る)、10.267a19-20 (晴れた夜には頭上に確認できる、恒星天球の斉一な運動を述べて、「或る一つのもものが連続的に変化していること、明らかである」、) が有る。

周知の如く「先言措定」は、『範疇論』第二章の内属問題の解明に際して、アリストテレスの根本語の一つ *hupokeimenon* に対して井上忠が工夫、案出した訳語である。私はこの訳語を借用しているわけであるが、この語を、「我々が否応なく前提せざるを得ないもの、現に前提しているもの」という程度の意味合で、当然のことながら私の自己責任に基づいて、用いている。

変化恒常論に対してアリストテレスが想定する反論、および、それに対する駁論は、次の三つである。(イ) 全て、或るもの甲から別のもの乙へ、である転化は、転化がそのうちで行われる反対項 (*ta enantia*) を転化の終点たる末端項 (*peras*) として含まねばならぬ。故に、永遠の転化は有り得ない。←反対対立者 (*ta antikeimena*) に至る、数的に同一な変化が恒常的 (*aei*) でない、という論点は正しい。しかし、連続的であり永続的である、ということによって数的にも同一である変化が有り得る。Cf. 「円運動のみが永遠かつ連続的な転化である」(8.265a11-12)。(ロ) 無生物 (*ta ap sukha*) に於いても、不変化の状態に在り続けて来たにかかわらず、或るとき変化し始める、という消息を我々は目にする。←これは、当該無生物 (A) の外なる起動者 (K) の動向によって説明可能である。従って、問題は、AがKによって起動されあるいは起動されない消息の解明に帰着する。(ハ) (ロ) の消息が生物 (*ta empsukha*) に於いて取り分け顕著であるのを、我々は目にする。無生物とは異なり、生物は外部の起動者を必ずしも必要としない。ちなみに、この自己起動性こそ、生物の生物たる所以である。しかして、小宇宙 (*mikros kosmos*) たる動物に於いて自己起動が可能であるのなら、現在考察対象としている大宇宙 (*megas (k.)*) に於いても、自己起動が可能であるはずである⁽⁹⁾。←三つの反論のうち、最も難問度が高いこの反論にはこう答える。「動物に内在する部分の或るものが常に変化しているのを我々は目にするが、この部分の変化の原因は当該の動物自身ではなく、動物を取り巻く環境である⁽¹⁰⁾。動物が己を変化させる、と我々が言うのは、ひとり、場所変化のみである。従って、環境が身体中に多くの変化を引き起し、これらの変化の或るものが思考または欲求を変化させ、この思考または欲求が動物全体を変化させる、ということ、必然である。感覚変化はいささかも無いかかわらず或る変化が内在し⁽¹¹⁾、再び動物が目覚める睡眠という現象は、かかる事例の一つである」、と。

(3) 第三章 変化・静止に関する宇宙構造の場合分け【日常の経験事実が我々に告げるように、時に応じて静止し、変化する事物が有る (同一事物が変化と静止の双方に関与する、ということが有る)。】

アリストテレスは考察の出発点を「存在者の或るものが或る時は変化し或る時は静止するのは何故か？」に定め (253a22-24)、この間が意味する所を特定するため、以下のような場合分けを行う。なお、Graham, 63-4 を承け、《》に、想定される論者名を記す。

A 万物恒常静止 (<i>panta êremein aei</i>) 《エレア派 (パルメニデスなど)》

B 万物恒常変化 (<i>panta aei kineisthai</i>) 《ヘラクレイトス》
--

⁽⁹⁾ 「小宇宙」、「大宇宙」については、cf. 「睡眠と夢」註 40。

⁽¹⁰⁾ 6.259b8-11 に、「動物中には動物が自ら起動するのではない変化、即ち、成長、衰退、呼吸 (*anapnoê*) の如き変化が内在する。各動物は、己が起動する変化はしておらず静止している場合にも、これらの変化をする」、とある。なお、cf. Ross, ad 25311-13。

⁽¹¹⁾ Ross, ad 253a20 が指摘する如く、6.259b11-13 でこの消息が詳述される。「食物が消化されると動物は眠り、食物が分離されると目覚め、己を変化させる【当然、場所変化する、即、移動する、の謂である。動物の自己変化はこれしかないのだから】。」

C 一部変化、一部静止 (<i>ta men kineisthai</i> <i>ta d'êremounta êremein</i>)	C1 一部恒常変化、一部恒常静止 (双方関与者は、無し) (<i>ta men kinoumena kineisthai aei ta d'êremounta êremein</i>) 《プラトン》
	C2 万物変化かつ静止 (<i>panta pephukenai omoiôs kineisthai kai êremein</i>) 《エムペドクレス》
	C3 一部恒常変化、一部恒常静止、一部両者 (変化と静止) 関与 (<i>ta men aei tôn ontôn akinêta einai, ta d'aei kinoumena, ta d'amphoterôn metalambanein</i>) 《アリストテレスが組する常識の立場 (the common-sense view)》

アリストテレスが、全難問の解決を有しており、この研究の終局である、として採択するのは C3 である (253a30-32)。(なお、C3 は、(2) (ロ) の消息解明の出発点ともなる。)

(イ) A (万物恒常静止論) の検討、否定

アリストテレスの論点は、「変化の存在は、感覚によって自明である」(253a32-b6)、というにある⁽¹²⁾。実際に立ち上がって歩いて見せ、以て「二分割」パラドクスを論駁したディオゲネスの例の逸話は、この論点を拡充する 254a30-33 に対する註釈に於いて、*Simplicius*, 1205.24-28 が挙げるものである⁽¹³⁾。また、‘The practical demands of life keeps us from actually trusting in any theory which is too remote from our experience.’ と言い、方法的懐疑を遂行するに際して通常的生活習慣を守ろうとしたデカルトに言及する *Graham*, ad 253a32-b2 も興味深い。さらに、cf. *Met.* Γ 4.1008b12-31 (矛盾律否定論者の実際の行動), 5.1010b3-11 (アテナイにいる夢を見たレビュー在住者の、覚醒後の振舞)。

(ロ) B (万物恒常変化論) の検討、否定

万物静止説同様に偽であるが、万物静止説ほど自然研究に背馳はしない万物変化説の論駁は、分量・性質・場所の三範疇に亘ってなされる。

①アリストテレスは、点滴が石を穿ったり、石上に芽生え、石中に根を下ろした植物が石を分割する場合、或る閾値を越えた後に、穿石、割石が一挙に実現する、という事情(この事情は、さらには、VII5 (最終章) .250a16-19 で挙げられた曳船の事情⁽¹⁴⁾になぞらえられる)に分量変化(=成長、衰退)をなぞらえ、分量変化には分量変化が行われない中間期間、静止期間が有り⁽¹⁵⁾、分量変化は連続的に行われるのではない、と主張する。この如

⁽¹²⁾ 254a24-30 で付加される論点、「存在者は不変である」、とのエレア派の主張が真であるとしても、感覚にはそのようには見えぬから、「存在者が変化する」という見解を我々は持つ。ならば、変化は有る。見解とは表象 (*phantasia*) の是認 (*sunkatathesis*) であり、表象とは現実態に即した感覚による変化である(『心魂論』III3.429a1-2) 以上、見解の有る所、変化が有るから」と併せ、*Ackrill* が分析している。

⁽¹³⁾ アンティステネスについても、同工の逸話が有る (*Elias*, 109.6)。

⁽¹⁴⁾ 或る船を百人がかりで百メートル曳けるなら一人では一メートル曳ける勘定になるが、実際には、一人では船はビクともしない。

⁽¹⁵⁾ *Graham*, ad 253b13-14 が言うように、アリストテレスの趣意は、‘there are periods in either the

く、成長の増加分、衰退の減殺分は無限に分割し得ても、増加分、減殺分の全体は、或るとき到来し、或るとき退去する。

②性質変化も、性質変化分が無限に分割し得るからといって無限に分割し得るとは限らず、性質変化は往々にして一挙に生起する。氷結がその事例である。

③中空にある石は下方に移動し、地上にあつて初めて安らう。このように、構成要素のそれぞれについて固有の場所が有る以上、場所変化が間断無く行われてはいない（己固有の場所に於いてある事物は静止している）。

(ハ) C1（一部恒常変化、一部恒常静止論）の検討、否定

①（イ）、（ロ）の場合と同様、同一事物が時に応じて静止し、変化するのを我々が目にする、という日常の経験事実を根拠に否定される。

②（ロ）①で見た如く成長は静止を内包している⁽¹⁶⁾し、強制的な変化は変化以前の静止状態を前提している。

③成長、強制変化同様、生成・消滅も、生成・消滅の開始前および終結後に静止を内包するので、C1は生成・消滅と相容れない。

④実体変化以外の変化についても、これら三変化が一種の生成・消滅であることは、ほぼ万人の見解である。甲から乙への変化ならば、性質・分量変化の場合、甲が消滅し、乙が生成するのだし、場所変化の場合、甲から出発して乙に於いてあることになるのだから。故に、全ての変化は、その前後に静止を内包する。

(ニ) C2（万物変化かつ静止論）の検討

C2については、「C2はエムペドクレス説と結び付けて理解するべきだ」、と受け取れる発言（cf. Ross, ad 254a16）をするのみでC2の検討は行われず、可能な選択肢として残っているC2とC3のいずれが妥当かを証示することが今後の課題である、ということを確認して章を終る。

（４）第四章 変化者は、全て起動者により変化する【変化者には、変化を引き起こす起動者が有る。他者に強制されて変化する場合は勿論、自己起動者と見える動物も、心魂が身体の起動者となっている。心魂を持たず従って自己起動し得るはずのない四構成要素（さらに、これらからなる複合体）の己固有の場所への運動についても、直近・直前の構成要素から当該構成要素への転化を引き起こす起動者と、当該構成要素の運動妨害要因除去者としての起動者の、二つの起動者が見出される。】

本章冒頭の、起動者、変化者の分類を表示する。

分類と説明			事例
I 自体的なもの (<i>kath'hauta</i>)	1 己によるもの (<i>huph'heautou</i>)	自然によるもの (<i>phusei</i>)	己の心魂によって動く、動物の全体 (cf. Ross, ad 254b17-20) 【これに

process of increase or the process of decrease in which no physical change is going on?ということである。

⁽¹⁶⁾ Ross, ad 254a9-10 でロスが傾く解釈に従う。

		【変化の原理が己のうちにあるもの】	対し、動物の <u>身体</u> は、自然に反しても変化し得る。】
	2 他者によるもの (<i>hup'allou</i>)	i 自然によるもの	軽いもの、重いもの
		ii 強制により、自然に反するもの (<i>bia kai para phusin</i>)	上方に動く土性の物、下方に動く火、動物の部分 (逆立ちして歩く人間【通常的位置 (<i>hai theseis</i>) に反する (<i>Ross, ad 254b23-4</i>)】、地面を転がる人間【通常(場所)変化方式 (<i>hoi tropoi tês kinêseôs</i>) に反する (<i>ibid.</i>)】など。)
II 付帯的なもの (<i>kata sumbebêkos</i>)	1 起動者、変化者に所属することによるもの (<i>tô huparkhein tois kinousin ê kinoumenois</i>)		歩行する、教養有る者【自体的に歩行する人間に教養が付帯している】(<i>cf. Ross, ad 254b9</i>)
	2 部分に即するもの (<i>kata morion</i>) 即己の或る部分が起動したり変化したりするもの (<i>tô morion ti autôn kinein ê kineisthai</i>) (254b11-12)		目や胸が健康になる故に健康になる身体 (<i>cf. Ross, ad 254b10</i>)

II は I から派生する用法だから、II は考察の外に置く。(イ) I2ii の場合、変化者が起動者によって変化する、という事情が最も明白である。(ロ) この事情が次に明白なのは、II の場合である。ただし、船を動かす船乗りと動かされる船体が区別されるように動物を動かす心魂と動かされる身体とが区別され、かくして、動物全体を取ってみれば、動物は己自身を動かす、という具合になっているように思われる。(ハ) 最も不明瞭な I2i の場合についても、やはり起動者によっていることを、現実態、可能態のそれぞれを二分することによって説明する。アリストテレスの説明を表示する。

	《X》第一可能態	《Y》第二可能態、第一完成態 (第一現実態) (『心魂論』 III.412a27, b5)、〈態勢 (<i>hexis</i>)〉	《Z》(第二) 現実態
事例 1	学習中の者	既に知識有るも、知識を現に用いてはいない者	知識有る者、真理見物している者
事例 2	いまだ冷たい可燃物 (可能態に於いては熱い)	火	燃やす
事例 3	水 (可能態に於いては空気であり、軽い)	空気 (現に軽い)	上昇する

事例 3 が、I2i の説明となる。このように、先ず、X を Y に、たとえば水を空気に変え

る起動者が、この場合は、冷・湿の水を暖めて暖・湿の空気に変ずる太陽が有る。

さらに、YをZに変える起動者も有る。下表の事例3が該当事例である。

	事物の本性＝変化の真因	事物本性発現の妨害要因	妨害要因除去者 ＝変化の付帯因
事例1	屋根は本来崩落する	柱	柱を撤去する者
事例2	皮袋は本来水面に浮上する	石	石を取り出す者
事例3	火は本来上昇する	蓋	蓋を外す者

(5) 第五章 第一起動者は自己起動し、かつ不被动である【被動変化者と起動者の連鎖に於いて起動者を求め行く無限遡及が禁じ手である (*anankê stênai*) 以上、第一起動者は、自己起動者たる動物中の不被动の起動部分たる心魂であるか、自己起動者たること抜きに、従って、大きさを持たぬ不被动起動者であるかでなければならぬ。】

第一起動者は自己起動する。如何なる起動者連鎖に於いても、被動しかつ起動するものの無限連鎖は有り得ないから (例えば、「石←杖←手←人間 (第一起動者)」という連鎖について考えよ (但し、「x←y」は、「xの起動者はyである」、と読む))。

さらに、自己起動者は、不被动の起動部分と、被動するが必ずしも起動しない部分とを持つ (258a18-20)。【なお、後者は必ず大きさを持つから、全ての自己起動者は、大きさを持つ (cf. *Simplicius*, 1251.28-31)。】

(6) 爾余

以下、第一の起動者は永遠、不被动、単一である (6.258b11, 12, 259a6-13) こと【自己起動者たる動物の心魂は起動対象である身体を必ず有し、かつこれのうちに在る以上、身体の被動に伴う付帯的な被動を免れない。しかし、付帯的にであれ被動する動物の心魂をいくら寄せ集めてみても、永遠の変化は保障されない。故に、永遠の変化の起動者たる、永遠の第一起動者が無ければならぬ。しかして、その数は、「自然事物中には、…より善きものがあるべきである」 (259a10-12) から、無限個ではなく有限個、さらには単一、と見なさねばならない】、場所変化が第一の変化であるが、場所変化以外の変化は連続的であり得ぬこと (7.261a27-28 (cf. 9.266a1-5 (*phamen*)), 31-32)、直線上では永遠の連続変化は有り得ず、円環運動のみが無限の連続変化であること (8.263a2-3, 265a10-11)、円環運動が第一の運動であること (9.265a13)、有限者が無限時間起動することも、有限大の事物中に無限の能力が存することも、無限大の事物中に有限の能力が存することも不可能であり、従って、第一の不被动の起動者は、分割されず、部分を持たず、大きさを持たないこと (10.266a12-13, 24-25, b6-7, 267b18-26) ⁽¹⁷⁾、また、当該起動者は円環 (*kuklos*) に在ること (267b5-9) ⁽¹⁸⁾、が述べられる。

⁽¹⁷⁾ ちなみに、これらの証明は帰謬法でなされる。

⁽¹⁸⁾ 「恒星天球の運動が一様であるためには恒星天球と当該起動者の関係が転化してはならぬから、当該起動者は、恒星天球の中心か円環かのいずれかに在るのでなければならぬ。ところが、一般に、起動者の最も近くにいるものは最も速く動く。最も速く動くのは全天空 (= 恒星天球) だから、当該起動者は円環に在る」、という理路である。

(7) 自然の斉一・単純性

アリストテレスが先言措定した自然の斉一性、単純性について付言する。

①『天空論』II14に於ける地球球形の証明のうち、感覚に現れる所 (*ta phainomena kata tēn aisthēsin*) を通じる二つの副次議論 (297b23-298a20) は分りやすい。一つは、【当然、満月の時にのみ生起する】月蝕の際の月の輝部と暗部の暗部から見た境界線が常に凸であることから、太陽からの光を遮る地球の形状を球と推論するもの (通常の盈虚の場合、境界線は凸、直、凹の順に変移する)、いま一つは、南北方向の僅かの移動によっても地平線・水平線 (*ho horizōn kuklos*=可視領域を区画する円環) が異なり来り、ために頭上に仰がれる諸星が大いに變移することから、地球の球形のみならず、地球がさほど大きからぬことを推論するものである。

しかし、アリストテレスの、これに先立つ主要議論 (297a7-b17) は、重いものは全て中心に向かって一様に結集するから地球は球形である、というものであり、論点先取の誤謬を犯している感がある。彼がこのような論をなしたのは、「無際限に漠々と広がる平坦な大地」などという締りの無い図柄が、彼の先言措定していた自然の斉一・単純性に初めから抵触していたからではないか、と筆者は推測する。

②地動説を始めとする近代科学は、アリストテレスのこの先言措定に共鳴し、これを受容し、徹底したものである、とすることができる。

二 『形而上学』Λ巻に於ける神の存在証明

『自然学』VIIIに於いて語られるのは、無限の力を有し、従って、永遠の変化を起動し得る、大きさ及び部分を有さぬもの、即ち神が、天球の円環にいる、ということのみであり⁽¹⁹⁾、神の在り方や、神が変化を起動する方式が語られるのは、Λに於いてである。即ち、①神は、欲求対象あるいは思考対象 (*to orekton kai noēton*, 7.1072a26) が欲求主体あるいは思考主体を動かす仕方で⁽²⁰⁾、*primum mobile*たる恒星天球 (*ho prōtos ouranos*, 7.1072a23) を動かす。恒星天球のこの変化が、爾余の変化の源泉となる。②神の在り方は、至善、至福、従って理性活動という現実態であり (cf. 『ニコマコス倫理学』X)、しかも己自身即ち理性活動を対象とする理性活動である。③エウドクソスが案出し、カリッポスが改鑄した同心円球理論をさらに改鑄し (cf. *ta phainomena apodōsein*, 8. 1073b36-37, 1074a1)、恒星以外の天体の運動を説明する。④Λに於ける第一 (=究極) 起動者の初出は第四章末尾 1070b34-35

ちなみに、*Ross I*, cxxxiv は、‘this (=267b6-9 の主張) ... is an incautious expression which should not be pressed. Aristotle’s genuine view undoubtedly is that the prime mover is not in space.’と記し、アリストテレスの *genuine view* の典拠に、『天空論』19.279a18 を挙げている。

⁽¹⁹⁾ Cf. ‘Nothing is said here of the mode of operation of the first cause; Aristotle considers, presumably, that the task of *physics* is ended when he has shown that the eternity of bodily movement demands a cause that is not bodily.’ (*Ross*, 94)

⁽²⁰⁾ その故は、通常の、接触による起動方式だと、起動者もまた、被動者によって被動すること必然であるからである。「被動せず起動する」(ibid.26-27)。

であるが、5.1071a15-16 で、質料（火、土など）、形相（人間）、起動者（父）のほか、水平方向ならぬ垂直方向にある起動者たる、太陽および、十二宮 (*ta zôdia*)⁽²¹⁾の真中を横断する（8.1073b19-20, 26-27）黄道 (*ho loxos kuklos*=天球の赤道に対して二十三度半ほど傾いた大円) が人間の原理として挙げられる⁽²²⁾。しかし、これらの詳細について述べることは今は措き、以下、Λに於ける神の存在証明に話を限定する。

既に述べた如く、Λで究極起動者 (=神) への言及が初めてなされるのは、第四章末尾に於いてである。「さらに、これらのほか、万物の第一のものとして万物を起動するものがある⁽²³⁾」(1070b34-35)、と。しかして、神の存在証明がなされるのは、第六章に於いてである。いま、第六章の当該論証の首尾を再述する。

第六章は、「自然実体が二つ、不変化実体が一つと、三つの実体が有った (*êsan*) のだから、【最後に言及した】不変化実体について、永遠不変の或る実体が有ること必然である、と語るべきである」、と語りおこす。

êsan は philosophical imperfect で、第一章末尾近い 1069a30-b2 の分析を指示する。この箇所語られた三種の実体とは、以下に表示する如きである（ただし、【】は、あるいは結論を先取りもした、筆者の補足）。

実体の種別		具体事例	注記	当該実体を対象とする学問
感覚実体	可滅の感覚実体	植物や動物	【その存在、種別について】万人が同意している (<i>homologousin</i>)。変化を伴う。	自然学 【動物学など】
	永遠の感覚実体	天体【、天球】	変化を伴う。	自然学 【天文学】
不変化実体		①形相+数学対象 ②(形相+数学対象)がそれへと還元される単一の自然本性 (<i>phusis</i>) ③数学対象のみ 【④神】	【①はプラトン説、②はクセノクラテス説、③はスペウシポス説 (cf. <i>Ross II</i> , ad 1069a30-32)。ちなみに、 <i>Thomas</i> , 570 は、①②を <i>Platonici</i> 、③を <i>Pythagorici</i> と解している。】	自然学以外の学問 【形而上学・神学】

⁽²¹⁾ ちなみに、*ta zôdia* (十二宮) が定められた黄道帯 (=黄道を中心とする、黄道の南北それぞれ八度の帯) の訳語の「獣帯」はドイツ語の *Tierkreis* などを承けたものであろうが、縮小語 *zôdion* の元なる *zôon* は『範疇論』1.1a3 の「像」の方 (cf. *LSJ*, sub *zôdion*) であると思われるから、同名異義者に由来する誤解であろう。

⁽²²⁾ Cf. 「人間と太陽が人間を生む」(II2.194b13)。

⁽²³⁾ 34 は、*Bonitz*, ad 1070b34 の主張にかかわらず、諸写本どおり *hôs to* と読む。

【④がアリストテレス説】

さて、「永遠不変の或る実体が有ること必然である」、と語るべきである所以は 1071b5-20 で述べられるが、当箇所の議論は、12 の *Alla mên*⁽²⁴⁾ を境に、前半と後半に分たれる。

(1) 前半の議論

「(イ) 実体は存在者のうちの第一のものである。(ロ) ゆえに、全ての実体が可滅的であるなら、全存在者が可滅的である。(ハ) しかし、変化は、変化が生成することも、消滅することも不可能である。(ニ) 変化は永遠であるのであったから。(ホ) 時間もまた、生成することも、消滅することも不可能である。(ヘ) 時間が無いなら、先後が有り得ないから。⁽²⁵⁾ (ト) 従って、変化もまた、時間と同様に連続的である。(チ) 時間は変化と同一であるか、変化の或る受動状態であるから。(リ) 場所変化だけが、しかも、円環場所変化だけが、連続的である。」(1071b5-11)

(イ) はアリストテレスの持論であり、彼が $\Gamma 2$ 、 $Z 1$ など随所で主張する所であるが、本巻では、1.1069a19-26 で語られた⁽²⁶⁾ (cf. *Ross II*, ad 1071b5)。彼が念頭に措いているのはこの箇所である、と考えてよいだろう。しかして、この箇所で彼が言う実体とは、他範疇に卓絶する、筆頭範疇たる実体範疇の謂である (cf. 1069a21,22)。いま、このことだけ確認しておこう。

(ニ) の *ên* も philosophical imperfect であるが、アリストテレスが念頭に措いている箇所は、*Ross II*, ad 1071b6-10 が参照させる如く、『自然学』VIII1-3 である、と取るのが穏当である。

一方、時間の恒在を介して変化の永遠を論証する (ホ) 以下は、VIII 1.251b10-28 (cf. 註 5) と類似するものの小異が有り、 Λ に独自の、別の議論と考えるのが順当であろう。

(リ) もまた VIII7-8 で証明される所である (cf. *Ross II*, ad 1071b10-11)。

このように、前半の議論は『自然学』VIII の論証を前提している。

(2) 後半の議論

⁽²⁴⁾ ‘Progressive: proceeding to a new item in a series, introducing a new argument, or marking a new stage in the march of thought.’ (*Denniston*, 344) の用法。

⁽²⁵⁾ (ホ) (ヘ) の理路は、‘If you say time comes into being, you imply that before that there was no time; but the very word ‘before’ implies time.’ (*Ross II*, ad 1071b8) と解する。

⁽²⁶⁾ アリストテレスは、〈A〉宇宙乃至万有 (*to pan*) が或る全体をなす (*hôs holon ti*。内的な秩序有る統一体を成す動植物の如き、と考えてよいだろう) か、〈B〉継起する (*tô ephexês*) のみであるか、いずれかである、と二様の場合わけをし、いずれと想定しても実体範疇が第一のものである、と主張する (実体範疇は、Aの場合には第一の部分 (*prôton meros*)、Bの場合には第一の項となる)。

以上の私の解釈は、*Ross II*, ad 1069a19-21 で *Bonitz*, ad 1069a18-30 を論駁しつつロスが主張する解釈に一致する。

なお、ロスは B を、10.1075b37-1076a3 で言及される、万有の本質・実体 (*ousia*) を前後の脈絡なき挿話 (*epeisodiôdês*) とするスペウシッポス説、と取る。あるいはそうかもしれない。いずれにせよ、アリストテレスが検討しているのは、複数事象からの構成体は緊密な統一体を成すか、雑然たる聚合体に過ぎないか、のどちらかである、という、ごく常識的な見解に過ぎず、さして深刻な問題が検討されているわけではない、と思われる。

「(ヌ) しかし、起動可能者 (*kinêtikon*) 乃至作動可能者 (*poiêtikon*) があっても、これが現実活動している (*energoun*) のでないなら、変化は存在しないであろう⁽²⁷⁾。(ル) 可能態を有するものが現実活動しない、ということはあるから。(ヲ) ゆえに、形相を制作する人々のように永遠の実体を我々が制作しても、それは無益である。形相の内に、転化せしむること可能な原理が内在しないならば (*emotional future condition*⁽²⁸⁾ (*efc*))。(ワ) 従って、形相なる実体もまた不十分である。(カ) 形相以外の実体⁽²⁹⁾もまた、不十分である。

(ヨ) もしもこれが現実活動しない、なんてことであれば、変化は存在しないだろう (*efc*) から。(タ) さらに (*eti*)、現実活動はしても、当の実体 (*ousia*) 【=実体範疇に所属し、独立存在するもの】の実体 (*ousia*) 【=本質】が可能態である、なんてことであつ (*efc*) ても、変化は存在しないだろう。(レ) 永遠の変化が存在しないことになるから。(ソ) 可能態に於いてあるものは、存在しないことが有り得るから。(ツ) ゆえに、実体 【=本質】が現実態であるような原理が無ければならない。」(1071b12-20)

以上、(ヌ) から (レ) までの理路のうちの核心を成す論点は (ヌ) の根拠たる (ル)、および、(タ) (レ) の根拠たる (ソ) であり、全体の結論は (ツ) である (*Ross II*, ad 1071b21)。

(ヲ) (ワ) (カ) は、先の表の①~③説への挨拶であり、アリストテレスにとっては論駁対象に過ぎないこと、論を俟たない。

しかして、後半の論証は、『自然学』VIII には見られなかった要素である。

(3) 議論全体の骨格

議論全体の骨格を再確認する。

A.変化は永遠に存在し続ける。B.ゆえに、変化という存在者を含め、一切の存在者の第一者たる実体のうちに、永遠に存在し続ける、永遠実体 X が無ければならない。C.可能態を有するものは、現実に存在し、現実活動する、とは限らないから、X は、現実態そのものであり、(さらに、1071b21 の表現も用いるなら) 質料抜きのもの、神である。

このように、Λ の神の存在証明は、『自然学』VIII を踏まえつつも、VIII では用いなかった現実態、可能態の論点を導入するものであり、VIII と異同がある。

三 アリストテレス神論の生けるもの

『自然学』VIII に於けるアリストテレスの神の存在証明が、取りも直さず、自然にとって不可欠な要件である変化の起動因の、従って、彼の宇宙論の最終的な解明が成功した、

⁽²⁷⁾ ‘there need not be (always) movement’ の意である、と *Ross II*, ad 1071b13。この用法の未来時制についてロスが参看させる *Index* 754b5-12 は、推論の有り得る帰結を述べる用法の項である。

⁽²⁸⁾ ‘When the protasis expresses strong feeling, the future indicative with *ei* is commonly used instead of *ean* with the subjunctive, ... The protasis commonly suggests something undesired, or feared, or intended independently of the speaker’s will; the apodosis commonly conveys a threat, a warning, or an earnest appeal to the feelings...’ (*Smyth*, 2328)

⁽²⁹⁾ *Ross II*, ad 1071b16 は、ロバンが示唆する the Platonic world-soul を否定し、数学対象の如きを挙げる。

とは言い得まい。彼の論証の鎖の一つ一つを吟味するなら、様々な問題が見出し得るから。

そもそも、地球の中心が即ち宇宙の中心であり、宇宙は恒星天球を以て限りとなす、という彼の天動説を信じる者は、今日いない。しかして、これは、この宇宙中には有限大の事物しか存在しないことの論証の前提となっている。また、事物と力を有限大と無限大にそれぞれ二分し、相互に対応させる議論は、あまりにもroughである。さらに、円運動を自然な運動とするのは誤っている。私が再述した一（1）（イ）（ロ）の議論もあちこち際どいし、（5）の*anankê stênai*原則を承認せねばならない根拠も無い。

従って、VIIIに於ける、変化の永遠性の論証を前提しているΛ6の神証明の前半もまた、成功しているとは言えない。後半についても同断である。現実態を本性とする実体の存在を假構しなくても、この世界が偶々このように存在し続けてきただけである、と言い得る以上。

畢竟ずるに、神の存在を理論的に証明しようとする試みは、ついに破れざるを得ないのではないか（cf. *Ross I*, cliv⁽³⁰⁾）。

しかし、彼の証明が全面的な失敗である、と言うわけにも行かない。

まず、宇宙を包括的・統一的に説明しようとする彼の試みが、現代の宇宙論の先蹤であることは間違いない。*Graham*, x が、‘The answers Aristotle gives are very different from contemporary answers. But in his relentless pursuit of ultimate presuppositions, we recognize a kindred spirit to that of the modern cosmologist.’という如きである。

何よりも、我々はアリストテレスの論証の随所に、彼の健全な現実分析を見出すことができる。註8で数え上げたいいくつかの先言措定の指摘、生物変化の分析（VIII2,4）、分量・性質・場所変化がいずれも静止を前提とすることの指摘（VIII3）、可能態、現実態の二義の解明（VIII4）などがそれである。これらは、彼の宇宙論の是非にかかわらず、それ自身のmeritを保持し続けている。

最後に

研究会で、岩田靖夫さんから、Λの神の存在証明がなぜ成功していないのか、とのご質問を賜った。『自然学』VIIIとΛの神証明には異同がある。その異同を明瞭にするべく、二

⁽³⁰⁾ ‘In a general sense, Kant was probably right in holding that the practical reason has more to tell us about God than the pure reason.’

ちなみに、ニュートンもまた、『プリンキピア』の末尾で神を語る。即ち彼は、太陽と惑星と彗星の最も優雅な協同（*elegantissima compages*）の始原を知性と能力ある存在者の配慮と主宰（*consilium et dominium*）に求め、他の恒星あるいは太陽系についても事情が同一であるから、万有の支配者を、*Pantokratôr*たる主なる神と定めている（*Newton*, 527-8）。

なお、ニュートンが直説法で語るのは太陽系についてであって、恒星については接続法で語るのみである。当時の資料蓄積状況に鑑みると恒星の観測データは極めて乏しいのだから、これは蓋し当然である。ニュートンの研究は太陽系に終始し、恒星には直接は及んでいない。

の大半をを新たに書いた。また、 Λ の神証明評価にも言及するべく、 \equiv を書き改めた。

指示文献

- (文献指示は、文献名の直後に付したカッコ内の、欧文献の場合は斜体の、略称による)
 上林昌太郎「睡眠と夢—アリストテレスの『自然学小論集』に基づく一試論—」(「睡眠と夢」)(『国際武道大学研究紀要』第16号(2000))
- J.L.Ackrill, 'Change and Aristotle's theological argument' (*Ackrill*) in *Idem, Essays on Plato and Aristotle* (Oxford, 1997 (1991)), 131-141
- Alexander Aphrodisiensis, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria* ed. M.Hayduck (*Alexander*) (Berlin, 1891)
- H.Bonitz, *Aristotelis Metaphysica*, Volumen II (*Bonitz*) (Bonn, 1849)
- Idem, *Index Aristotelicus*² (*Index*) (Berlin, 1870)
- J.D.Denniston, *The Greek Praticles*² (*Denniston*) (Oxford, 1966)
- Elias, *In Aristotelis Categorias Commentaria* ed. A.Busse (*Elias*)(Berlin, 1900)
- D.Graham, *Aristotle: Physics, Book VIII* (*Graham*) (Oxford, 1999)
- I.Newton, *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*³ (*Newton*) (1726 (1687¹))
- W.D.Ross, *Aristotle's Meaphysics*, Vol.I, II (*Ross I, II*) (Oxford, 1953 (1924))
- Idem, *Aristotle's Physics* (*Ross*) (Oxford, 1936)
- Simplicius, *In Aristotelis Physicorum Libros Quattuor Posteriores Commentaria* ed. H.Diels (*Simplicius*)(Berlin, 1895)
- H.W.Smyth, *Greek Grammar* (*Smyth*)
- Thomas Aquinas, *In Duodecim Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio* (*Thomas*) (Marietti, 1964)